真実の行方

ギイくんの悩み事 (2002.2)

　心も体も、一つになって早一ヶ月。
　夏の日差しがキラキラと輝き、木々の間から光の柱が幾重にも折り重なっている。
　その光とは裏腹に、ギイの横顔には何故か愁いの色が見える。ぼんやりと託生の机を見詰めては深い溜息を吐く姿は、相愛の相手と幸せな日を過ごしているにしては、少しおかしい。
　何をそんなに悩んでいるのかというと……。
　幼い頃から託生一筋で、この顔に似合わず実は誰とも付き合ったことがなかったのだ。
　ようするに、託生が初めてのお相手というわけで。
　それに引き換え、本人の意思ではないにしろ、託生にとっては、ギイは二人目の相手である。
『感じればそれなりに反応する』
　託生の告白で訊いた言葉。
　託生はされて「感じる」ということを、知っているのだ。
「託生が感じているのはわかるが、もしかしたら兄貴より下手なのでは……」
　麗しい顔を曇らせて悩んでいるのは、そう自分のテクニックがいかほどの物かということである。
　もっともっと託生を感じさせて、ぜひとも「欲しい」と言ってもらいたい。
　そう思いながら、事になると夢中になってしまって、早急に求めてしまう。
「オレがイク前に、託生を何回かイカせられるくらいのテクニックを身に付けなければ……」
　眉間に皺を寄せて考える内容ではないのだが、他の人間で試すわけにはいかず、本人は到って真剣である。
「これは、ちょっと勉強した方がいいよな」
　そしておもむろに机から取り出したのは、「愛の四十八手」。
「う～ん、これは昨日したよな。こっちは体の堅い託生には無理そうだから、そうだな……」
　ハタから見れば、難しい文学書を読んでいるように見えるであろう。
「お、この松葉崩しあたり、良さそうだな。両手も開くし託生の顔も見られるし」
　目当ての体位をみつけて、ギイの顔がほころぶ。
「よし！今日はこれで行こう」
　鼻歌を歌うように、引き出しの奥深くに本を仕舞いこみ、愛する託生の赤く染まった肌を思い浮かべる。
　恥かしげに目を伏せ、濡れた吐息でオレを煽っていく。その煽りでノックアウトを食らうのだが……。
「今日こそは託生が気を失うくらい、激しいのをやってやる！」
　胸に拳をあてて、心に誓う。
　今夜の託生の運命はいかに。それは全てギイの手にかかっている。

すみません。先に謝っておきます。
ギイのイメージぶち壊し！もう、それはそれは楽しんで書いてますよ（笑）
某サイトの話題に触発されて浮かんだものですが、私の書くギイって、やっぱりスケベ（爆）
って、私がスケベだからか？！
（２００２．９．４）

託生くんの悩み事 (2002.8)

「崎、葉山、いるか？」
　ノックと同時に舎監の先生の声がした。
「オレも託生もいますよ」
　ギイがドアを開けながら、顔を覗かせる。
　先生も毎晩毎晩、大変だな。寮の端から端までを二往復だもんね。ぼくだったら、一往復で息切れがしてそうだ。
「３０５号室は、OKと。そう言えば、この頃真面目だな、崎」
　先生はノートにチェックを入れながら、顔も上げずにギイに話し掛けた。
「何がです？」
「いや、１年の頃は、よく点呼の時にいなかっただろ？」
「そうでしたっけ？」
「あぁ。赤池相手じゃなかったら、俺も一言二言言ってたところだったがな」
「そんな昔の話は覚えていませんよ」
　ギイってば１年の頃から、不良だったんだ。
　初めて煙草を吸っている所を見たとき、ぼくは目を疑っちゃったよ。
「じゃな、お休み」
「お休みなさい」
　ギイがパタンとドアを閉めて、鍵を掛けた。
「よく抜け出してたの？」
「あ？あぁ、いろいろと忙しくてな」
「どうだか」
「何だよ。信じてないのか？」
　不服そうな声にクスリと笑って、ベッドに腰掛けギイに向き直る。
「そうじゃないけど。でも、点呼のときは必ずギイがいたから、初耳だなって思って」
「それはね、託生君」
　カチッと電気を消して、ギイが近寄ってきた。
「ちょっ……ギイ！」
「託生と１秒でも長く、二人きりいたいからだよ」
　そのまま、ベッドに押し倒されてキス。
「愛してるよ」
「んん！……待って……待ってってば……」
　ギイの肩を押し返し、熱い口唇から逃れる。これ以上口唇を合わせていると、話せなくなることは必至で、でも、今日こそはギイに言っておかなければならない。
「なんだよ？」
　さっさとぼくのパジャマの中に、忍び込ませていた手を止めて、不満たっぷりの顔でぼくを見る。
「あ……あのさ……多……くない？」
「何が？」
「何が……って……あの……その……」
「あぁ！SEXの回数か？」
　ぼくは思いっきり、ギイの頭を殴った。
「あたっ！……いってーな。お前、殴ることはないだろ？」
「そんな露骨に言わなくてもいいだろ？！」
　あまりのストレートな台詞に、僕のほうが恥ずかしくなってしまう。
「多いか？」
「だって……」
　一ヶ月前ギイを受け入れてから、体育のあった日以外は……その……ほとんど毎日といった状態

で、ここのところ午後からの授業は欠伸を噛み殺しながら受けているのだ。
　いくら若くても、これはちょっと問題ではなかろうか。
「自覚なかったんだけどな。そんなに多かったか？」
「多い……と、思うよ」
　アメリカ人は知らないけど、たぶん日本では多いんだと思う。……訊いたことないけど。
「なぁ、もしかして、オレ無理させてたのか？」
「え……あ……そんなことはないけど……」
　ないけど、いかんせんギイの体力にはついていけない。それだけは明白。
　ギイは僕の上に乗り上げていた体を起こし、
「じゃ、今日はおとなしく寝るとするか」
「そうしていただけると、助かります」
「その代わり……」
　ベッドの上に正座して、素直に頭を下げた横で、ギイの低い声がした。
「なに……？」
　恐る恐る顔を上げると、不敵に微笑んだ艶やかな顔。
　嫌な予感がする。
「今日は、オレのベッドで寝よう」
「……は？今、おとなしく寝るって言ったじゃないか？！」
「だから、おとなしくオレのベッドに、二人で寝ようと言ってるんだ」
　なにが『だから』なんだろう。狭いベッドに二人で寝たら、体が休まないじゃないか。
「でも……」
「オレ、その気だったのになぁ。託生の言うこと訊いて我慢しているのに、託生はオレの言うことを訊いてくれないんだな」
「う……」
「ほら、来いよ」
　言葉に詰まったぼくにニヤリと笑い、腕を引っ張ってギイのベッドに連れて行かれた。
「落ちたら危ないから、託生、奥行って」
　そのままベッドに押し込まれる。
　とたん、ふわりとシーツから立ち上るギイの香りが僕を包み込み、ドキリとした。知らず知らず、胸の鼓動が激しくなる。
　一体、ぼくはどうしちゃったのだろうか？！
「オレのベッドに泊まるの、初めてだったよな？」
「う……うん」
　ぼくの横に体を滑り込ませながら、ギイがシーツを整えて掛けてくれる。
　上からも下からも、むせるように香るギイのコロンに、体が熱く反応していく。
　どうしよう……。
　今日はダメと言いながら、ぼくがこんなになっちゃってるのをギイに知れたら、絶対恥ずかしい！
「託生、どうしたんだ？」
「な……なんでもないよ」
「そうか？じゃ、お休み、託生」
　ギイは右手で腕枕をしたまま、そっと口唇を寄せた。
「痛っ！……た～く～み～、お前、オレに恨みでもあるのか？」
「ご……ごめん！！」
　ギイの口唇を避けようと、とっさに突っ張った手がギイの顎にHITしてしまった。
　だって、今キスなんかしたら、絶対バレちゃう！
「お休みのキスから逃げるとは、託生はもうオレの事、愛してないんだな」
「どうして、そうなるんだよ？！」
「オレのこと、好きか？」

「……うん」
「じゃあ、お休みのキスはいいよな？」
　言うなり、ギイはぼくの上にガバッと乗り上げ、有無を言わさず口唇を重ねた。
「んっ……！」
　ジタバタともがくぼくを難なくベッドに押し付け、熱い舌先でそろりと入り口を辿る。
「く……ぅ……」
　力が抜けた一瞬を狙って、ギイの熱い舌が絡んできた。妖しくくすぐる様にぼくの舌を玩び、逃げる隙を与えてくれない。
「愛しているよ……」
　心地よい声色に体が過剰に反応してしまう。優しく滑るように頬に伝い、瞼に耳にキスを落とし、もう一度口唇に舞い戻ってくる。
「ギ……イ……」
　やっと口唇が離れたときには、息も絶え絶えでギイを力なく見ていた。ぼくとギイの体が密着して、二人の熱いモノがパジャマ越しに合わさっている。
　ギイに知られてしまった！
　瞬間、ぼくは恥ずかしさに耳まで真っ赤になって、目を反らせた。
「わっ！」
「相変わらず色気のない台詞だな」
　突然ギイがぼくを握り締め、クスクス笑いながらゆっくりと撫で上げた。
　それだけで、跳ね上がった心臓と一緒に、呼吸が乱れてしまう。
「う……ん……ダメ……だってば……」
「託生がその気になってくれたんだもんな。勿体無い」
　その時、ふとある疑問が頭に浮かんだ。
　妖しく攻め立てるギイの腕を掴み、動きを阻め、
「もしかして……」
「ん？」
「初めからそのつもりで、ギイのベッドに誘ったってこと……？」
「大当たり」
　ニッと笑って頬にキスをしようとしたギイの頭を、ポカリと殴った。
「ってーな。託生、お前殴りすぎ」
「自業自得だろ？！ぼく、自分のベッドに帰る！」
「いやー、これで託生がその気になってくれなかったら、自信なくすところだった」
「ギイ！降りてってば！」
「オレの匂いでその気になってくれるなんて、オレって愛されてるなぁ」
「ギイ！！」
　ギイの腕をすり抜けてベッドを降りようとしたぼくは、ぐいっと力強い腕に引き戻された。
「帰さない」
　笑ってはいない瞳で見詰められ、近づいてきた口唇に体が金縛りにあったように動けなくなる。
「愛してるよ、託生」
　幾度となく繰り返されるキスに、体も心も溶けて意識が遠ざかっていく。ギイだけが、ぼくの全てになっていく。
　ギイの腕に委ねて体の力を抜いたとき、ギイが優しく耳元に口唇を寄せ、囁いた。
「今日は、松葉崩しやってみような」
「うん……え？！」
「了承の言葉、しかと訊いたぞ」
「な……こんな時に訊くなんて、ギイ、ズルイ！！」
「男に二言はないもんな、託生」
「ヤダ！絶対ヤダッ！！やっぱり、ぼく帰る！」

プロレス並の死闘の末、どうなったのかは書くまでもないだろう。

「ギイくんの悩み事」の続編だったりします。
もう、ダメですね。終わってます。
ボツってた原稿を拾い出して続きを書いたのだけれど、なんだかなぁ。
いいかげん託生くんに怒られそうだ（笑）
（２００２．９．４）

真実 (2002.9)

　授業が終わり、珍しく用事がないギイと一緒に帰ってきた３０５号室。
　とりあえず宿題を片付けているぼくの後方で、ギイはベッドに腰掛け、愛読書プレジデントを難しい顔をして読んでいた。
　普段とは違う、大人の顔。こういうときのギイは、特に格好いい……。
　ぽっかりと見惚れてしまったぼくに気付いて、ギイがクスリと笑った。
　ぼくは慌てて机に向き直り、手が止まっていた宿題の山に向かう。
　毎日一緒にいるのに、ちょっとした仕草にときめいてしまうなんて。ぼくって、かなり重症かも？
　コンコン。
「ギイ、いるか？」
　ドアの向こう側から聞こえてきたのは、章三の声。
　ギイはプレジデントを枕もとの棚に戻し、ドアに向かった。
「章三、どうした？」
「例の件でちょっと……」
　む。この二人、また何か企んでいるな？
「悪い、託生。すぐに戻るから」
　言うなりギイはドアを閉めて出て行ってしまった。
「もう、いつもぼくを除け者にするんだから」
　何か出来るわけではないから、話したってしょうがない事なのだろうけど、除け者にされるのは、気分のいいものじゃない。
　相棒というのは、恋人とは違った意味で一番近くにいるような気がする。
「と言ったら、赤池君怒るだろうな」
　パタンとノートを閉じて、自分のベッドに寝転がる。
　ギイがいないだけで、何もする気がなくなってしまうのは、どうしてだろう。
　これって、ギイに甘えきってるってことなのかな。
　そうだとすると、男として情けないぞ。
「よし。気合入れて英語の宿題片付けよう」
　いや、どっちにしても宿題はしなくちゃいけないのだけど。
　そのとき、かさっとギイのベッドから物音がした。
「なに？」
　見るとギイが読んでいたプレジデントが、横に倒れている。
　ぼくは元に戻そうと、プレジデントに手を伸ばした。
「あれ？」
　よくよく見ると、背表紙の幅より中身が分厚くなっている。何かを挟んでいるような……。
　不思議に思い本を取り出してみると、小冊子のようなものが挟まっていた。
「なんだろう、これ？」
　人のものを勝手に見るというのはいけないことだけど、先程ギイがぼくに隠れて読んでいた本に興味が湧かないわけがない。
　そして、その本を開くと……。
「なっ……！！！」
　目の前に広がった本の内容に、一気に血が上る。
　その名も『愛の四十八手』
　図解付きで説明をしているその横には赤丸が書き込まれ、その印の付いている物は身に覚えのあるものばかりだ。
「ギ……ギ……ギ……」
　難しい顔をしてビジネス雑誌を読んでいると思っていたのに！
「ただいま」

　ノックもなしでドアを開けたギイの顔が、ぼくの手元にある本を見て固まった。
「ギイのスケベ！！」
　いきなり怒鳴った僕に、しまったと顔に書いて後ろ手にドアを閉め、前髪をかきあげる。
「見つかっちまったか」
「もう、なんて本読んでるんだよ？！こんな……こんな……！」
「そりゃ、託生との愛の時間を楽しむ為に。決まってるじゃないか」
　開き直ったのか、しれっと恥ずかしげもなく言ってのけるギイ。
「でもでも……！こんなのどこで手に入れたんだよ？！」
「もちろん、本屋で」
　当たり前だろ？
　本屋で……。いや、当たり前なんだけど、ギイに羞恥心を求めるぼくが間違っていたのか。
　ギイはがっくりと肩を落としたぼくの手から本を取り上げ、パラパラとページを捲り、
「今日は、これをしような」
　嬉々として目の前に差し出した。
「ギイのバカーーーーーーーーーッ！！！！！」
　本をギイの顔に投げつけて、部屋のドアを乱暴に開け出て行く。
「託生～～」
　情けない声のギイを無視して、廊下をずんずんと歩く。

　もうもうもう、ギイなんて知らないっ！！！

壊れきってますね（汗）
半年振りに2年生バージョンを書いたら、もう楽しくって（笑）
でも、どう書いても私のギイってオヤジだ……。
（2002．10．10）

first (2003.1)*Night*

「託生……ごめん」
「……」
「なぁ。謝るから、許してくれよ」
「……」
「託生？」
「……」
　背後から聞こえる、大きな溜息。
　ギイは壁側を向いて寝ているぼくのベッドの横に座り込んで、ぼくの機嫌を取ろうとかれこれ３０分はそこにいた。
　そう。あの本を見つけてから、ぼくはギイとの会話を絶っている。
　男だからそのくらい興味があって当然だろうと人は言うかもしれないけど、ぼくにとってはお互いを知る為の愛の行為であり、それこそ遊びで体を重ねているわけではないのだ
　SEXそのものに興味があるんじゃないかとぼくが疑っても、おかしくないと思う。
「託生、あんな本読んで悪かったよ。ごめん」
「……謝るくらいなら、どうして読んでたんだよ？」
　反省している様子のギイに、許す許さないは別問題で理由だけ訊いておこうと、壁を向いたまま口を開いた。
「どうして……って、オレ、託生に『欲しい』って言ってもらいたかったんだ」
「はぁ？！」
　唐突になにを言ってるんだ？！
「いつもオレが欲しがってて さ、必ず託生は嫌がるし。もしかしたら、下手で託生に負担をかけて嫌がられてるのかもと思って、それで」
「……」
「託生が感じるのを勉強……」
「うわぁぁぁぁ！！もう、いい！！」
　あまりの言い訳に耳を塞いだ。
　たぶん顔は火を噴くくらい、真っ赤になっていることだろう。
「わかった！わかったから、もう言わないで！」
　自分の情事を外から眺めているような感覚に、そのままシーツを被って潜り込んだ。
　あまりの羞恥に心臓がバクバクなっている。
　ギイの言わんとするところは、ぼくに求めてもらいたかったということだ。
　確かに、ぼくもギイに求められて嬉しくないわけじゃない。はっきり言って、嬉しい。
　でも、ぼくにはそんな恥ずかしい事、絶対出来ない！ましてや『欲しい』なんて台詞、天地がひっくり返っても言えそうにない！
　不公平じゃないかと言われても、恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。
「なぁ、託生。この際ついでだから、訊いておきたいんが……。返事はYESかNOかでいいから」
　シーツに潜ったまま身動き一つしないぼくに、遠慮がちにギイが言った。
　どんな質問をされるのか、恐ろしい予感が頭を過ぎったが、ギイの気持ちもわからないでもなく、
「……YES」
　と、覚悟を決めた。
「オレとするの、嫌じゃないか？」
「……YES」
「じゃあ、負担にはなってないか？」
「……YES」
「……オレ、下手か？」
「……はぁ？」

　上手いか下手かと訊かれたら、他の人はどうかは知らないけど、ぼくが……その……そうなっちゃうってことは、上手いのかなぁとは思うけど。
　それにしても、どうしてそうギイはこだわるのだろう。
　シーツから目だけ出してコロンとギイに寝返りを打った。
「そんなに気になるの？」
「……いや……ちょっと訊いてみただけだ」
　そして、ふっと視線を外す。
　訊いてみただけにしては不可解なギイの行動に、彼の不安がわかってしまった。
　もしかして、ギイ、兄さんと比べてる？
　ギイにとって、ぼくが初めての人じゃないかと感じてはいたけれど、ぼくにとってギイは自分の意思はともかく初めての人じゃない。
　だから、ぼくが比べているのじゃないかと思っているのかも。
　そんな事ないのに。
　ギイに抱かれて兄さんを思い出したことは、初めてのあの日だけなのに。
　でも、ぼくが素直にならないから、そこまで君を不安にさせていたんだね。
　とは言っても『上手い』なんて、それこそ比べているみたいだし、まして口に出すのも恥ずかしい。
　ぼくはギイに向かって両腕を伸ばした。
「託生……？」
　問いかけながらベッドに腰掛けたギイの首に腕を廻して、口唇を重ねる。
「ぼくからキスをしたのは、ギイだけだよ」
　好きだよ、ギイ。
　ギイの全てが好き。
　ギイの右手を両手で包み込み、指先にキスをした。
「……っ！」
　そのまま指の上を滑らせて、手の甲に口付ける。
　すると、ギイは慌てて自分の手を取り戻した。
「え？」
「おまえ、突然突拍子もないことするのな」
　きょとんと見返すぼくに、ギイは苦笑を漏らした。
「突拍子もない事？」
「変な想像しちまうだろ？」
　取り返した手で、ゆっくりとぼくの頭を撫でる。
「あまりオレを煽るなよ」
「煽ってなんかいないよ、ぼく」
「だから……」
　大きな溜息を吐き、しょうがないなというような優しい瞳で、軽くキスを落とした。
「お子ちゃまの託生くんを汚しちまうような、とんでもない想像をしただけだ」
「なに？」
「わからなくていいよ」
　くしゃっと前髪をかき上げて、ギイはくるりと踵を返した。
「ギイ？」
「今日は大人しく寝るよ。お休み」
　え？え？
「ちょっ……ちょっと待ってよ」
　ぼくは起き上がり慌ててギイの腕を掴んだ。
「ぼく、なにか変なことした？」
「したわけじゃないけど」
「けど、なに？」

　ギイは困った顔をして、ぼくの手を取り指先を口に含んだ。
「んっ！」
　瞬間電流が走るように、快感が駆け抜けていく。
「わかったか？」
　溜息交じりの言葉に、ギイの言わんとしている事がわかった。
　首まで赤くして、こくりと頷いたぼくに、
「これ以上託生の側にいると理性なくなっちまうから」
　と言って、自分のベッドに向かう。
　ぼくはギイのパジャマの裾を握って、引き止めた。
「託生？」
「あ……の……初めてだから……下手だと思うけど……」
　言いながらギイの腰に腕を廻し、ズボンの上から口付ける。
「託生？！」
「下手でも……いい？」
　上目遣いにギイを見ると、驚きの表情のままぼくを凝視していた。
　這わせた手で前を開け、ゆっくりとギイを掌で包んで、ペロリと舐める。
「うっ……」
　とたん、じわりと先端から先走りの液が滲み出てきた。
　その液も絡め取り、下から上に口唇を這わしていく。何度も何度も繰り返すと、ギイの口から乱れた息が、せわしなく吐き出される。
　ギイの全てを感じたくて、舌先で丁寧に舐めていくと、ビクンとギイが跳ねた。
「託……生……」
　いつまでも舐めるだけで、咥えようとしないぼくに焦れたのか、愛しそうに髪を弄っていたギイが、自分自身に押し付ける。
　そして、口中深くに受け入れると、ギイの口から安堵の溜息と共に、うめき声が漏れた。
　吸い付きながら、上下にスライドすると、口の中に先走りの液が充満し、口唇から溢れた液が顎を伝って落ちていく。
　息苦しさよりも、ギイを喘がせている心地よさで、ギイを愛する行為に夢中になった。
「託生、ダメだ！」
　突然ガバッと剥がされ、濡れた口唇も拭わないまま放心したようにギイを見上げた。
　ギイの熱い視線が、ぼくの口唇に釘付けになる。
「託生……！！」
　シーツを蹴飛ばし、ギイは噛み付くようにぼくの口唇を覆った。
「んっ……！」
「愛してる……！託生……託生っ……！」
　ベッドに押し倒され、荒々しく服を剥ぎ取ったギイに、いつもの余裕は感じられない。
　受け止めかねる激しさが、ぼくの体を熱く奔放させる。
「はぁ……ギ……イ……ギ……」
「託生……託生……」
　熱いうねりの中、高まった熱に捕えられ、ぼくは成すすべもなく激流に飲み込まれた。

「託生……ごめん」
　ギイの腕枕でまどろんでいる耳元に、ギイが謝罪の言葉を言った。
「え……なにが？」
　きょとんと訊き返すと、ギイはぼくをまじまじと見詰めて苦笑し、
「本」
　自分のベッドを指差す。

「忘れてた……」
　ぼく、怒ってたんだ。
　託生らしいなと、クスクス笑うギイにつられてぼくも笑い出す。
　ま、いいか。
　ギイの気持ちもわからなくもないし。
　あそこまで怒ったら、ギイもあの本を使うこともなくなるだろう。
　今はただ、暖かい腕の中でまどろみたい……。

　そして、あの本はぼくの目の前から消えた。
　行方を知るのは、数年後の事となる。

続く……（ウソです～～～～・笑）

秘密(2003.6)

「一応、全部詰め込んできましたが」
「あぁ、すまなかった。島岡、助かったよ」
　まどろみの中、漏れ聞こえてきた声に、うっすらと目を開けた。
　ベッドサイドの時計の針は、１０時少し前。
　寝過ごしてしまったけど、日曜日だから許してもらおう。
「あれ、ギイ？」
　隣にいるはずのギイの姿はすでになく、ドアの向こうから幾人かの足音が聞こえてくる。
「何してるんだろ」
　ぼくはベッドを抜け出し、慌てて顔を洗いパジャマを着替えた。
　ドアからそっと覗き見ると、ギイの部屋のドアが大きく開き、かなりの数のダンボールが積まれている。
　もう既に運び終えたのだろう。部屋の中にはギイと島岡さんだけが残っていた。
「おはよう、託生」
　ぼくに気付いたギイが、にっこり笑って手招きする。
「おはよう、ギイ。おはようございます、島岡さん」
　手招きされるがままにギイの側に寄ると、すかさず
「おはよう」
　と、ギイが頬にキスをした。
「ギイ！」
　アメリカでは普通なのだろうけど、いや、いつも朝の挨拶のキスは受けるのだけど、ここには島岡さんがいるんだよ。
　他人の前で頬とは言え、キスをされるのはかなり恥ずかしい。
　そんなぼくにひょいと肩を竦めて、ギイは島岡さんに視線を移した。
「後は、自分でするよ。日曜日だってのに、悪かったな」
　台詞とはうらはらに、ちっともすまなそうな顔じゃないギイに、島岡さんは苦笑をした。
「いいえ、これで何度も五番街に足を運ぶ事がないと思うと、このくらいどうってことないですよ」
「言うなぁ、島岡」
　島岡さんの嫌味をさらりと受け流し、ニヤリと笑う。
　相変わらず私事で島岡さんを使ってたんだな、ギイは。
　呆れ返ると同時に、嫌味のひとつやふたつ言いたくなるよなぁと、島岡さんに同情してしまう。
「では、私はこれで失礼します」
　島岡さんがドアを閉めたのを確認し、ギイはダンボールの山に向き直り、深い溜息を吐いた。
「さてと、一日仕事だな、これ」
　何が入っているのかはわからないが、確かに丸々一日かかりそうな荷物である。
「ねぇ、これは一体何が入ってるのさ」
「本」
「本？」
「資料をいちいち実家に取りに行くのも面倒でさ。島岡に運んでもらった」
　ちょっと違うような気がする。
　実家に取りに行ったのは島岡さんであって、ギイは指示していただけじゃないの？
「でも、その前にブランチにしようぜ。腹が減っては戦は出来ぬと」
　チロリと見たぼくの視線に、ギイはあからさまに話題を変え、キッチンに向かった。

　ブランチを終え二人で食器を洗い、ギイはぼくの手を引いて自分の部屋に戻った。
「託生も手伝ってくれるよな？」
　当たり前のように言われて癪に障ったが、これと言って予定のないぼくには、哀しい事に反論のしよう

がない。
　仕方ないなぁ。
　こっそり溜息を吐いて、目の前にあるダンボールに手を掛けた。
「どれから、並べるの？」
「とりあえず、大き目の本から……っと、大きさと種類書いてもらったから・・・・」
「じゃあ、これからかな」
　バリバリとテープを剥がして、本棚の前に立っているギイに手渡す。
　ギイは背表紙を確認しながら、順番に並べていく。
　二人三脚の息の合った行動に、一日がかりだと思えた箱の山は、２時間ほどで残りひとつとなった。
「えっと、これは……『その他』って書いてあるよ」
「分けられないのを、入れてくれたんだろ。どれ？」
　テープを剥がすと……なるほど。
　雑誌や小説、果ては祠堂の卒業アルバムまで入っている。
「お、懐かしいなぁ」
　ギイは、床に座り込んでアルバムを手に取りパラパラと捲り始めた。
「もう、早く終わらせようよ」
　言いながら、箱の中身を取り出していたその時、一冊だけ書店のカバーが掛かっているのが見えた。
　それも、日本の書店のカバーである。
「何の本だろ」
　ギイを見ると、まだアルバムを眺めている。
　一応英語は話せるようになったが、本を読むのならやはり日本語の方が読みやすい。
　借りていこうかな。
「ギイ、この本貸して」
「うん？」
　カバーの掛かった本をひらひらとギイに見せると、瞬間ギイは顔色を変えその本を奪い取った。
「な……なに？」
「これは、ダメ！」
「それ、日本のだろ？貸してくれてもいいじゃないか」
「いや、止めた方がいい」
「なんだよ、ギイのケチ」
「ケチで結構」
　ぼくの視界から消すように本を後ろ手に持ち、ギイが珍しく顔を引きつらせる。
「……何の本？」
「たいした本じゃない」
「ふうん」
「日本の小説なら、まだ他にあるから、な？」
　余りの慌てぶりに、ますますその本が気になる。
「一体、何の本なの？」
　にじりと寄ると、ギイは座ったままずりっと後ろに下がった。
「託生の趣味じゃない」
「見ないとわからないだろ？」
　もう一歩近寄ると、ギイも後ろに下がる。
「力ずくで見てやる」
「うわっ！託生、止めろ！！」
　ギイに抱きつき背後に廻った本を手探りで探す。
　その時、勢い余ってギイの上に覆い被さるように二人して床に倒れ込んでしまった。
「……って～～～」
「ごめん、ギイ！」

「お前なぁ……」
「ごめんね、痛かったよね」
　二人分の体重をもろ背中で受けたギイが、痛みで唸る。
　ギイの上から体を退けようと慌てたぼくの腰に、いつの間にかギイの腕が廻り動きを阻んだ。
「ちょっ……ギイ」
「悪いと思うなら、行動で示しなさい」
「え、あの、どうやって？」
「お詫びのキス、プリーズ」
　ニヤリと笑い、腰に廻した腕に力を入れる。
　服を通して感じるギイが熱く変化して、ぼくの顔に血が上った。
「ギ……ギイ……！」
「襲われているみたいで、この角度もいいもんだな」
　ぼくが恥ずかしがる事を承知で、わざと意地悪く言う。
「もう、離してよ」
「痛かったのになぁ。託生は悪く思ってないんだな」
「ギイ！」
　離してくれそうにない力に、ぼくは諦めて顔を近づけ軽く口唇を合わした。
「それだけ？」
　ニヤニヤと笑うギイを睨み、目を閉じてもう一度口付ける。
　とたん、体が反転し驚きに口を開いた瞬間を狙って、ギイが熱い塊を差し込んだ。
「んっ……」
　ジタバタと抵抗したのもつかの間、条件反射のようにぼくの体が無意識に応え、呼吸が浅くなる。
　味わうようにゆっくりと口中を彷徨うギイを、ぼくの舌が追っていく。
　からかうように絡んでは離れ、きつく吸い上げられ、飲みきれなかった甘い液が口を伝う頃には、ギイの大きな手は服の上からぼくの敏感な部分を焦らす様に玩んでいた。
「や……ギイ……！」
　シャツの上からの愛撫に、もどかしい想いが込み上げる。ギイの肌を直接感じたい欲求が体を熱く駆け巡り、背筋を甘い痺れが走り抜けていく。
「ギイ……ギイ……」
　この体をどうにかして欲しくて、ギイを縋るように見詰めると、ふっと微笑み目尻に口唇を落とし、
「ベッドに行こう」
　ぼくを抱き上げた。

　ギイに翻弄され眠りから覚めたのは、窓の外の太陽が傾きかけた頃。
　ギイが「モーニングコーヒーだ」と笑って差し出してくれたカップに口をつけ、ふと本の事を思い出した。
　また、誤魔化された……。
　同じ手に何度も引っかかる自分に溜息を吐いて、ギイを盗み見ると悪戯っ子のような顔して視線を外す。
　既にあの本は、ギイが片付けてしまったのだろう。
　でも、いつか見つけた時には、今度こそ読んでやるとこっそり呟いた。

オモテのつもりで書いて、でも思わず深入りしそうになった自分に渇を入れ、えっちを途中で切り上げました（爆）
えっちに雪崩れ込ませてしまうのは、私がスケベだって証拠でしょうか？？？
(2003.6.13)

奥付

真実の行方

りか

URL http://greem.shop-pure.net
MAIL greenhouse@shop-pure.net